

『奈良県高校剣道における有効打突となった技の機会と技の種類』

～全国大会と比較して～

3年6組 16番 徳弘 直也

1 はじめに

剣道とは、剣道具を着用し竹刀を用いて一対一で行う競技であり、稽古を続けることによって心身を鍛錬し人間形成を目指す「武道」である。

剣道の試合は、稽古によって習得した技術や理法を活かし、互いに全力を尽くして勝敗を決することによって、心と身体を鍛錬することが出来るものである。そして、試合で勝つためには打突の機会をとらえて打突し、有効打突になるまで連続して打突することが必要となる。

有効打突とは、「充実した氣勢、適正な姿勢をもって、竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し、残心ある打突」のことである。「打突部で刃筋正しく打突し残心ある打突」とは、竹刀の物打ちで相手の面部（正面および左右面）、小手部（右小手および左小手）、胴部（右胴および左胴）、突部（突き垂れ）を打突して、打突後も油断のない身構えと気構えをとることである。また、それ以外には打突の間合い、機会、体さばき、手の内の作用、強さと冴えが必要で、特に打突の「機会」は重要である。

剣道における打突の機会は大きく分けて「相手が出ようとするところ（以下、出ばな）」「相手が居ついたところ（以下、居ついたところ）」「相手が退いたところ（以下、退いたところ）」「相手の技の尽きたところ（以下、技の尽きたところ）」の4種類であるといわれている。

そこで、本研究では奈良県の選手はどの打突の機会を捉えて技を出しているのか、また、有効打突となっている技は何が多いのかを調査し、また、全国大会でのそれと比較検討することで、奈良県の選手の課題を明らかにすることを目的とする。

2 実験方法／研究方法／研究内容

全国高等学校総合体育大会、全国高等学校剣道選抜大会、玉竜旗高校剣道大会の試合と第72回奈良県高等学校総合体育大会の試合を分けて有効打突となった打突の機会を抽出して、「出ばな」「居ついた

ところ」「退いたところ」「技の尽きたところ」の4つに分類し分析を行う。

全国大会の試合の資料は、先行研究データを参照し、奈良県大会の試合は、第72回奈良県高等学校総合体育大会剣道の全試合を分析したデータを用いる。

表1 分析にあたった剣道有段者の特性

	年齢	剣道歴	段位
1	17歳	8年	2段
2	44歳	37年	教士7段

3 仮説／結果予測

高校生の試合の特徴は技の打ち合いになることが多くなるため次の技を出すスピードの速さや技を1本にする打ちの強さなどが必要となってくる。そのため、スピードが速いほうが勝つ「出ばな」、前に出る体重移動が難しい「退いたところ」といった技の機会被打たれることが多いのではないかと仮説を立てた。

4 結果

第72回奈良県高等学校総合体育大会における打突の機会の調査結果は以下に示す。

表2 打突の機会と技の種類

	メ	コ	ド	ツ	合計
出ばな	25	22	0	0	47
居ついたところ	10	4	3	0	17
退いたところ	12	3	2	0	17
技の尽きたところ	31	1	15	0	47
合計	78	30	20	0	128

表3 有効打突となった技の種類

	飛び込み	出ばな	引き技	二段技	返し技	合計
メン	25	31	15	6	1	78
コテ	5	25	0	0	0	30
ドウ	1	0	0	0	15	20
ツキ	0	0	1	0	0	0
合計	31	56	19	6	16	128

全国高等学校総合体育大会、全国高等学校剣道選抜大会、玉竜旗高等学校剣道大会における打突の機会の調査結果は以下に示す。

表4 打突の機会と技の種類

	メン	コテ	ドウ	ツキ	合計
出ばな	34	17	3	1	55
居ついたところ	14	8	4	0	26
退いたところ	4	0	0	0	4
技の尽きたところ	13	3	5	0	21
合計	65	28	12	1	106

表5 有効打突となった技の種類

	飛び込み	出ばな	引き技	二段技	返し技	合計
メン	14	23	22	5	10	74
コテ	0	24	3	3	0	30
ドウ	1	0	4	0	7	12
ツキ	0	1	0	0	0	1
合計	15	48	29	8	17	117

全国大会と奈良県大会において有効打突となった最も多い技の機会は「出ばな」であった。また、奈良県大会では「技の尽きたところ」で技を打たれるということが「出ばな」と同じ数になった。

5 考察

「出ばな」が一番多くなったのは、相手を攻め崩して相手が無理な体勢から技を打ってくるのを最短距離で技を打つと「出ばな」という技の機会を捉えられる。さらに出ばな技は同じタイミングで同じ技を打っても速いほうが勝つためどちらが打突したか分かりやすい。

奈良県大会では、「技の尽きたところ」も「出ばな」と同じ数であったが全国大会では、「技の尽きたところ」は少ないという結果になっている。この理由は全国大会では「技の尽きたところ」を次の自分の打突に備えたり、相手の打突をさばいたり、足を止めずに攻防できているが奈良県大会では「技の尽きたところ」足が止まり、次の展開に備えられていないのだと考える。

有効打突の内訳は128本中56本が「出ばな」の技であったその内の31本がメン、25本がコテであった。メンとコテが多く見られたのは相手の動きをよく見て相手の動いた瞬間に反応ができているからだと考える。

6 まとめ/結論

奈良県大会では「出ばな」の機会と「技の尽きたところ」の機会が最も多かった。

全国大会と奈良県大会は、有効打突がうまれる最も多い機会が「出ばな」であるので、練習では「出ばな」の機会をとらえる練習していけば試合ではよい成績が出るのではないかとと思われる。また、奈良県大会では「技の尽きたところ」で気を抜かず次の試合展開に備えた練習すればよいと思われる。つまり打突した後の防御や、連続打突、止まらない足さばきの練習などをし、身に着けることで、試合のレベルアップがはかれるのではないかと考えられる。

7 おわりに

この研究をするにあたって協力して下さった西田先生、保護者の皆さん、剣道部員本当にありがとうございました。

※参考文献

・宅和剛史 堂芝颯太「剣道における打突の機会について～高校生の全国大会に注目して～」添上高校SS科 卒業研究 2018